

寺島珠雄書誌目録刊行会会報

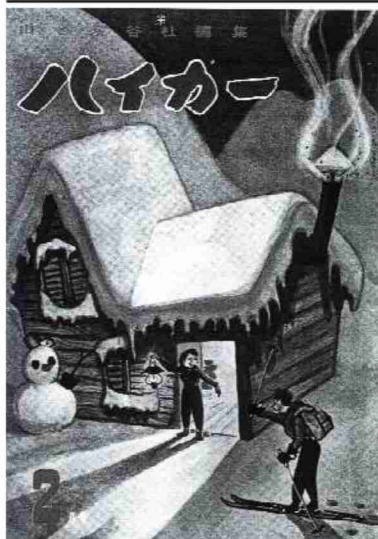
第三号

二〇二二年三月二十五日発行 発行人 中岡光次 編集人 前田年昭 連絡先 岡山県赤松市沼田四六八一（〒七〇九一〇八二）

ここに紹介するのは、寺島珠雄書誌目録【第一次】以降に見えられた山と溪谷社編集発行の月刊誌『ハイカー』の一九五九（昭和三十四）年二月号。謎の多いこの時期、小説など売文をしていた頃の寺島珠雄の様子の一端を示す貴重な資料である。掲載の「気まぐれ歩行者のメモー春日俊吉氏へ」は春日氏の隨筆に寄せて、無準備歩行者の思い出が綴られている。長さ約四千字（原稿用紙十枚）。

2月号 目次

冬冬のハイキング
寺島珠雄
ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性。冬山のハイキングは、春先のハイキングとは異なる。冬山のハイキングは、春先のハイキングとは異なる。冬山のハイキングは、春先のハイキングとは異なる。



【広告】書誌目録（完成版）のための資料
探索や調査行など本格化にあたって、情報提供とともに資金協力を募りたいと思います。お互い貧乏人ですが、どうか可能な協力をお願いします。

掲載者	掲載内容	掲載ページ
寺島珠雄	冬冬のハイキング	1-10
春日俊吉	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	11-20
中岡光次	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	21-30
前田年昭	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	31-40
山田太郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	41-50
田中次郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	51-60
佐藤三郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	61-70
鈴木四郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	71-80
高橋五郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	81-90
斎藤六郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	91-100

掲載者	掲載内容	掲載ページ
寺島珠雄	冬冬のハイキング	1-10
春日俊吉	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	11-20
中岡光次	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	21-30
前田年昭	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	31-40
山田太郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	41-50
田中次郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	51-60
佐藤三郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	61-70
鈴木四郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	71-80
高橋五郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	81-90
斎藤六郎	ハイキングの楽しさ、面白さ、そして危険性	91-100

「釜ヶ崎語彙集」由来—今夏出版予定にかえて 転生する街への鎮魂歌

中岡光次

「釜ヶ崎語彙集」が(仮題)として
編纂の作業が始まったのは72年9
月頃である。今から40年ほど昔の
ことになる。

である。「新日本文学」73年2月
号

4人で書いた243項目

当時ではもはや第××次と回数
数えられぬほど「暴動」は日常化
していた。またその年の5月には
暴力団経営の鈴木建設興業(鈴木
組)との実力対決に労働者側が圧
勝し、「やられたらやりかえす」を
合言葉にした実力闘争集団「暴力
手配師追放釜ヶ崎共闘会議」も結
成され、釜ヶ崎の街は日常的に緊
張感に包まれていた。

われわれとは代表寺島を含む四
人であり、少し後で発見された出
版「企画書」には「素描されて
いる」。

「解説には活動的な青年労働者
や職務上明示できない位置にある
者や地元商店主の進歩的分子など
が参加している」。

活動的な青年労働者と表現され
ればいささか面映いものがある
が、これは22歳の少し手前であり
当時岩田秀一を名乗っていた私の
ことである。「職務上明示できな
い」とされたのは大山潤造で、こ
れは寺島が勝手につけたペンネー
ム。釜ヶ崎労働者の就労斡旋にあ
たる財団法人西成労働福祉セン
ターの職員であつた、33歳「地元
商店主の進歩的分子」は寺島珠雄
の一貫した後援者であつた竹島昌
威知その人、寺島珠雄より三歳年
下の土蔵。自宅は釜ヶ崎の山の手

寺島珠雄はその状況をふまえて
言う。「特に釜ヶ崎では、「暴動」
で一年先行した山谷にくらべて、
さまざまな運動の持続と展開、対
応した妨害と抑圧のからみ合いは
重層多面化の度を加え、いわばこ
れだけの生き方で釜ヶ崎にかか
わっているわれわれの力で表現し
ようとしたのがこの釜ヶ崎語彙集

といわれる山王町で「三ツ葉屋」
という小さな洋品雑貨の店を開い
ていた。少し先から文芸誌「関西
文学」の編集長を十年勤めた詩人・
エッセイストである。

四人の分担受け持ちは次の通り
であつた。

岩田秀一 教援、暴動、新左翼と
組合関係用語
大山潤造 労働福祉センター・官
庁関係用語
竹島昌威知 地域的なこと、文化
寺島珠雄 労働用語、生活全般、
総括

必要な実証性、客観性をふまえ
て主観的記述をおこなうという態
度が共通の申し合わせになつてお
り、文体の調整と統一は寺島に一
任。これは多くの項目を組み合わ
せることによる労働者版「釜ヶ崎
辞典」であり、ドキュメンタリー
でありルポルタージュを意図して
いた。主観的記述があつてこそ
ルポルタージュ的性格が保証され
るといえる。

すでに引用した第一回を含め
て、この抄出文は二度「新日文
」に掲載された。これは関西編集と
して川崎彰彦からの依頼のよう
である。二度目は「住みかほ町のす

べてである」釜ヶ崎語彙集」と
と題され73年5月号に掲載され
た。一回目に掲載された項目を
拾ってみよう。

釜ヶ崎(a)／愛隣地区／三角
公園／飛田／飛田本通商店街／新
世界／霞町／労働者・労働者／ア
ンコ／現金と契約／「裸の公」／良
寛さん／釜ヶ崎／野鳥の会／学生
／「大阪城」／藤野昭三郎／医療を
考える会／社／越冬対策実行委員
会／入船温泉／一時預かり所／お
かい屋／京屋／大寅／ラーメン
／オカマ(男娼)／四五一賭博／ふ
ろ／貸本屋／大阪府労働部／あ
いりん総合センター／大阪勤労者福
祉協会／同労暴力団／朝鮮人

これだけで243項目に及び、寺
島珠雄が選んだ原稿では、総項目
数21。枝項目を加えると243項目に
及んでいる。

これらの項目だけをみると当時
の釜ヶ崎を知る者でなければ理解
不能のものが多く、「社」とは何、
なぜ自然保護団体の「野鳥の会」
が出てくるのだ、ということに
なってしまう。結局読んでもお楽
しみということだ。

しかもこれは十分なものではな
い。出版が決まってから項目の見

直し、追加を図るものとしており、今の私の目から見ても抜けているもの、加えたいものがある。さらには大状況の用語、例えば当時の釜ヶ崎に影響を与えた「ドルショック」などを加える必要ありと寺島はしており、そうであれば「石油ショック」など数項目の追加が必要となる。

当時の状況にわが身を置き直したうえで主観的に語ることは至難の技であり、物理的制約もあつて、遭されたものの現状維持で臨む他なかった。項目担当の数は寺島が圧倒的に多く、共同項目が13。岩田は58、共同項目は12。竹島は18、共同項目2。大山はこの企画が始まって半年ほどで職場を退職して釜ヶ崎を離れたこともあつていけば少ない5項目のみである。全体を「地域（仕事）（医療）」などタイトルなしの9章に分割してあつた。

直し、追加を図るものとしており、今の私の目から見ても抜けているもの、加えたいものがある。さらには大状況の用語、例えば当時の釜ヶ崎に影響を与えた「ドルショック」などを加える必要ありと寺島はしており、そうであれば「石油ショック」など数項目の追加が必要となる。

直し、追加を図るものとしており、今の私の目から見ても抜けているもの、加えたいものがある。さらには大状況の用語、例えば当時の釜ヶ崎に影響を与えた「ドルショック」などを加える必要ありと寺島はしており、そうであれば「石油ショック」など数項目の追加が必要となる。

連続する暴動のなかで

その年の11月15日には関西建設事件で交渉現場にいた労働者3名が恐喝未遂ということで全員現行犯逮捕され、見事なまでの府下全域にわたる分散留置という救援妨害で走り回った記憶がある。その半年前の5月6月は鈴木組事件から暴動の連発、釜共闘への二回にわたる手入れ、等によつて90名もの逮捕者が出ていた。12月下旬から始まった越冬闘争では私の住まいは日刊新聞の発行所となり、平日にはあいりん総合センターの便所が爆破される事件が起こり、翌年の2月13日には、私の住まいも前田年昭の部屋などとともに家宅捜索に襲われることになった。家宅捜索の時期が連想くすれていたら、編集会議の開催もどうなっていたかわからない。それよりも大山、竹島両氏に不当な干渉が当局から及んだことも考えられる。よくこんな時期に呑気に？語彙集などにかかすりあつていたらものだらけである。またそんな時期であつたからこそ語彙集をやるべき意味を寺島珠雄は感じていたのであらう。当時の労働者の闘いを、その展望への疑念をもちつつも支えていた私はその活動を整理

する必要を感じていたのかも知れない。

寺島珠雄は企画書のなかで語彙集を「底辺での生活と活動を案内しつつ、未来を展望させる」ものとして位置づけた。それは果たされているだろうか。

決して充分なものではないが、それは随所に伺うことができる。たとえば、

【朝鮮】労働者側から、民族や国籍や歴史に頓着しない搾取への闘いを提起するのが差別解消の第一段階である。……歴史をハンデとしない五分五分の相手として、労働者がピンハネする朝鮮人と闘つてゆくことが（勿論、何人とも同様に）連帯を創る。（て）

前記した鈴木組、関西建設はこの項目に入る人夫出し業者であつた。人夫出し派遣業は当時にあつては実に明快な法令違反であつた。

【ドヤ屋】「社」の項が、労働者の自然な結合の土着的な呼称だつたのを想起してもらいたい。呼びかけは「社」の意識的な創生を訴えている。そこで考えられてくるのは現場闘

争と補元しあう居住慣習、ドヤなどの労働者の結合、連帯ではないか。ミ経営者（土地建物所有者）に適正な利益を保障する労働者自治区としてのドヤ出現は空想であろうか。少なくとも「西成若占堀臨時革命政權樹立」という、一時ささやかれたスローガンよりは、はるかに現実的なのはたしかである。（一）

今の段階ではこれ以上は出し惜しみにしておきたい。

また食通の寺島は地区内の飲み屋、飯屋の項目を充実させている。私も飯屋など幾つか担当しているが、これは項目の多過ぎる寺島の分散でつち上げではないかと当初疑ったが、私の記憶にない喫茶店の生原稿も出てきた。手帳を破つたものであり、ということと取材に出かけてその場で書いたという証明であった。「はい、これ」と寺島に手渡したものであろう。

「釜ヶ崎語彙集」は寺島珠雄の「新日本文学」における事実上のデビュー作である。新日文加入の推薦人が向井孝と小沢田男氏であることは私の知識の中にあつた。

当時事務局におられた小沢氏にとつて印象深いものであることは承知していたから、「跋」は小沢氏にお願いし、快諾していただいた。出版の概要は次のとおりである。この出版不況の時代に出版を引き受けていた版元・新書館さんのためにも良いものに仕上げべく、各位の協力を得ながら奮闘している。

大切にしていたはずの 何かを取り戻したい

今、という時代になぜ「釜ヶ崎語彙集」なのか、という強い思いと迷いが常に私のなかにある。出版の打診に首を縦に振らなかった各社の指摘もそこにあつた。だから本のメインタイトルを決め切れないでいる。「語彙集」はやはりサブタイトルにすぎないような気がする。

私が釜ヶ崎を再訪してまた数年もたたない。三十数年ぶりの釜ヶ崎は「虎」に近いものに見えた。街なかのどこにでも見られる「福祉」の看板。不況は労働者をホームレスと追いやり、空室の目立つドヤは「福祉アパート」への転生を図る。かの懐かしき労働者組織

の共同事務所であつた「野鳥の会」北側一帯のドヤ群は、外国人旅行者バックパッカーへの安宿として転生を図っていた。インドネシア女性からホテル東洋の場所を尋ねられ驚いたものである。彼女たち三人のビザは「ワーキング」といういふかしげなものであつたが、08年のリーマンショックは受給条件の緩和もあつて高齢単身労働者を「生活保護」へなだれ込ませ、その数や八千に及ぶという。地区世帯の三分の一以上が「保護世帯」と化している現状は日雇労働者の街から福祉の街へと呼称変更せねばならないようである。当然暴力団資本による貧困ビジネス参入を目撃することにもなつた。当時のいつたい誰が今日の釜ヶ崎を予測しえたであらうか。

運動が沈滞し先細りする状況のなか、主流を除く新左翼諸派の流入は多彩であつた。彼らの眼には釜ヶ崎が「地上の星」と映っていたのだらう。中島みゆきは歌う。

「風の間のスバル」「砂の中の銀河」、やはりそうであつたように思う。「草原のベガサス」もいたし「街角のビーナス」もいた。髪剃りあとあざやかに薄化粧し、筋骨た

くましかった男娼達は街角のビーナスと呼ぶにふさわしかった。誰に見守られることもなく消え去つた彼・彼女達はどこへ行つたのだらう。彼女・達かたむろした商店街はシャッター通りと化していた。

釜ヶ崎は解体消滅しつつあり、一般社会の中に立派に侵入を果たしている。労働力調整の安全弁としての役割は釜ヶ崎から奪われ、増大した「非正規雇用者」や「フリーター」などへと転化された。感傷にすぎぬと言われればそれまでである。釜ヶ崎は非人間的な装いをまといつつ、最も人間性が発露し集積する街であつた。明確な街区をもつことは、この国における最も泥臭い人間的なエンクローチャーであつた。

しらすらしき市民社会なんぞからすれば、私にとって釜ヶ崎は地上の星であつたはずである。

橋下率いる「維新の会」大阪政権は釜ヶ崎に蓋をしようとするであらう。「見直し」を声高に主張する彼らにとっては、釜ヶ崎労働者に対する生活保護受給など泥棒に追い銭にはかならない。転生でき

八年前の数行との出逢い

佐藤信子

ね存在としての釜ヶ崎労働者の行き先は再び路上でしかなくなるのだろうか。今、なぜ「釜ヶ崎語彙集」なのか。釜ヶ崎の街が転生を余儀なくされている状況のなかで、眼に見えぬ何かの力によって「語彙集」が呼び戻されてきたような気がしてならない。単に橋下連の圧倒的登場をもっていうのではない。

虚偽の自供を強いられ、その責任に耐えかねてまわりの説得にもかかわらず自死を選んだ少年もいた。暴動に立ち上がった無数の労働者のくやしさを、そして怒りというものを見つめ直すことによつて、今という時代に何が失われ何がどう変化しようとしているのか、それを問うために必然性をもつて忽然と姿を顕してきたのではない。そんな気がする。

「語彙集」は時代の証人であり、各項目は個別的証言である。あるがままの姿を描き生活全般をも包み込んだ「語彙集」は、歴史の一面面として今、そして後世に伝えられることによつて、釜ヶ崎に生きようとする、あるいは聞かろうとする人達の糧になるはずであろうと私は思い、願う。鎮魂歌というより願魂歌がふさわしいのかも知れない。

私は「記憶」を回復したいと思うようになった。それはこの「語彙集」が私の手元に届いた時からである。「二、三日不眠の日が続いた。私にもこんな時代があったのが不思議でもあった。自身の今の

今年も残りわずかになりました。二十一年お便り頂き、ありがとうございました。寺島さんとは、一冊の『近代日本社会運動史人物事典』『日外アソシエート』『神谷暢の項』中の数行をとおして出逢いました。八年前には、「若き日の竹内てるよの作品」と「銅鑼」の仲間たち」という

小文を同人誌『甲府文学』に載せました。それを書いていて、てるよを献身的に支えた詩人、漢文社でアナ・キズム系の出版を行つた神谷暢のことを調べるのに、資料が見つからなくて探しておりました。前記の事典に神谷氏がのつていふことを知つて、それが大阪府中央図書館に

あるとのこと、同図書館に電話をいたしました。すると職員の方が親切にその項目を読み上げてくださったのでした。それを書き取つたのでした。神谷暢の生涯全体を知ることができ、難かつたのですが、同時に、言葉の端々から感じられる神谷暢への暖かい思いが胸を熱くしました。それを書かれた方が寺島雄雄さんだったのです。わずかに数行の「事典の一項目」ですけれども、神谷暢への情愛の感じ取れる言葉の端々を忘れることができない、それが、私の寺島さんとの出逢いでした。その時、寺島さんは四年前に亡くなつておられたことも知りませんでした。初めて知つたお名前だったのですが、非常に印象深く、お名前を忘れることはありませんでした。以来、お書きになつたものを出来る限り読むようになつてきました。その後、『アナ・キズムのうちそと』の中の「詩人追跡—ビルマで死んだ吉本孝

「一や遺言」に連載された「西山勇太郎ノート」などで、神谷輓、竹内てるよに對する深い理解を知ることができました。もつともそれも、ここ二、三年のことです。

コスモス忌で書誌目録刊行会のお話を承り、協力させて頂きたいと思いましたが、以上のようなことでございます。なんだ、そんなことだったの、と思われるかも知れませんが、自分でも不思議です。どうしてこんなに鮮明に記憶しているのかしら、と。電話の声を耳を澄まして一語一語書き取った寺島さんの神谷輓の解説文のその暖かさが八年間、私の胸中から消えない、そんなふうに申し上げたらいのしょうか。わずかに数行との出逢いでした。

〔書誌目録〕第一次 頂戴し、寺島さんの書かれたものの多さに圧倒され、同時に寺島さんについて書かれたものも加えて、こんな立派な目録を作られた中岡さん方の「苦勞」に心から敬意

を抱きました。「虚無思想研究」第十六号、寺島さんの追悼号に紫村美也という方が「……全体像の輪郭だけでもはつきりさせておきたい。いつか、本格的に寺島珠雄を調べようとする人の手掛かりになるものだけでもまとめておきたい」と書いておられました。目録刊行会のお仕

気になっていること、ふたつ

事は尊いと思います。只々、目録を拝見するだけで、寺島さんのことを知り、その周辺を知りたいへん学ばせて頂いております。とりとめもなくお書きしました。刊行会より頂いた目録ありがたく、大切にいたします。お寒い折から御身ご大切になさいます。

河内 紀

■ひとつは写真のこと

寺島さんが、レンズ付きのフィルム「写るんです」(特定のブランドではなく、店頭でま

めて売っているなかで一番安いのを購入するのだと言っていた。を持ち歩き、出会った人や風景などをパチリ・カチリと

か？

■ふたつめは映画のこと

昭和三十五年四月一日発行



③ 寺島珠雄 オリジナルプリント 大判大正区 大治橋 30,000
57×45cm 寺島珠雄筆墨館蔵書名入

やっていたことを覚えていて、いる方もおいて、思う。その写真はいつたどこにあるのか？寺島さんは何を見ていたのか？

同封したコピーは二年ほど前に古書カタログに掲載された寺島さんのものと思われる一

枚の写真(たしか神戸の方の古書店の出品と記憶)。大阪市大正区の大浪橋の写真に一岸をつな

ぎ人を逢わせ人が去る」と識語署名入り。実物は見ていないが、××とあるから、かなり大判の写真だ。

ここまで引き伸ばせばたとえれば、これはレンズ付きフィルムではなく、普通のカメラで撮影されたものだろう。もちろんこれ一枚という一ことはあり得ない。その他の写真はどこにあるのか？ それはどんな写真なのか？

またまた、当時大学でドキュ

メンタリー映画を制作していた小生が、この欄へ投稿、採用されたので、手元に置いておいた号に、この評が載っていた。気づいたのはつい最近のこと。

「記録・保存」の協力をしたい

古屋淳二

会報2号受け取り致しました。ありがとうございます。

11月におハガキを頂いていたにも関わらず、全くご返信もせず申し訳ございません。

コスモス忌で友人の加名義さんが以前より知り合いの前田さん、「ゆう」誌上で存じ上げていた中岡さん、このお二人が「寺島珠雄」の目録を刊行するといふことで協賛した次第です。

寺島さんとは全く面識ありません。知ったきっかけは高橋徹氏「古本屋月の輪書林」(晶文社)でした。この本に出てくる寺島さんの高橋さんへの想いがとても「優しく」印象に残りました。それ以降、数冊、寺島さ

寺島さんのことだから、もしかしたら下書きをノートに残しているのではないかと。ぜひ、探索をお願いしたい。

● 探

んの著作を買い、「南大堂」はその細かさに食い入るように読ませていただきました。

じつはコスモス忌も高橋氏の本でその存在を知ったぐらいのもので、特に知人もおらず、まさか数年後に自分がコスモス忌に参加しているとは、その時は思いもしませんでした。

現在、私は静岡県富士宮にある「アナキズム文獻センター」の東京事務局スタッフをしております。今回のような「記録・保存」について、文獻センターのようなどころがもつと協力できるようなになっていかねばならないのですが、まだまだ内実が伴っていないのが現状です。

● 探

もつとお役に立てるような「センター」を作っていきたく思っております。

● 探

当センター発行のカレンダー(毎年発行しています)と通信お送りします。ご活用いただけましたら幸いです。

資料等での協力はできませんが、告知・インターネット等デジタル関係などで何かできることがあれば、おつしやつてくださいます。ご協力させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。目録(完結編)とても期待しております。

お詫言と訂正

第一号二頁三段目末尾記載のファクシミリ番号とゆうちょ銀行振替口座番号に誤りがありました。心からお詫言して訂正します。正しくは下記「刊行会叢書」の広告に記載のとおりです。ごめんなさい。(前田)

寺島珠雄書誌目録刊行会叢書

I 『詩集 日野善太郎の詩』

1000円(税別)

II 『釜ヶ崎通信・別冊 まだ生きている』

2000円(税別)

★申し込みは寺島珠雄書誌目録刊行会事務局(中岡光次)まで

〒709-0812 岡山県赤松市沼田468-1 携帯080-5617-6669 ファクシミリ086-955-6261

ゆうちょ銀行振替口座 01300-5-55266 (口座加入者名義 寺島珠雄書誌目録刊行会)

お申し込みの際は、協賛金やカンパと区別できますよう払込取扱票の「通信欄」に麗書と明記をお願いします。また、初めて送金される方は、当会を知られた契機(紹介者等)を書き添えていただくと助かります。

『手づくり封筒の人・寺島珠雄』

冬晴れの日

ヘクソカズラの城垣表がびかりと荒っています

たなかよしゆき

おはがき拝誦 ありがとうございます。ございました。さて、寺島珠雄さんのことについて何か書けとのおはがきでしたが、すでに月報遊撃(長谷川修児ガリバン)の寺島珠雄追悼号(96/12)の一文を寄せていて、それ以上のことはあまりありません。

わたしはひとに対する憤り付きが悪く、せつかくの出会いチャンスを見逃してしまふことがたびたびです。寺島珠雄さんともうすぐ長くにつき合いでし

かありませんでした。出会いもいつだったか、はつきり思い出せません。多分、一対一ではなく、何かの会合だったからでしょう。ただ、推測するに、多分、川崎彰彦さんが介在しているものとおもいます。川崎彰彦さん(作家・当時『新文学』編集長)はわたしに目をかけてく

れ、わたしのガリバン刷りの小詩集に注目してくれていましたから。

川崎彰彦さんと寺島珠雄さんは仲がよかったので、わたしのガリバン詩集を見せたのでしよう。人づてですが、わたしのガリバンの文字がいていねいに切つてあつて、ほめてくださったとか。寺島さんの周辺の若いひとたちに、ガリバンの見本として見せていたとかきいて、うれしいおもいをしたことがあります。記録に残っているのは、『新日本文学』誌上で、わたしの第一詩集に書評をかいてくださったこと。また『月刊近文』の「横顔・

筆ペンでいねいに書いた几帳面な文字でした。いい字でした。小さなカメラもいつも鞆にひそませていて、ときどきパチリパチリと撮っておられましたね。

わたしと妻が手づくり通信として出していた『すみれ通信』(発行主体は妻の鳥越ゆり子)にも何か書いてもらった記憶がありますが、火災でバックナンバーすべてが揃わず、確かめるには時間がかかりそうです。

わたしも若いころには少しは鋭いところがあつて寺島珠雄さんにも注目していたいたのです。が、大して大きくはばたけず、タダのオツチャン、凡才鈍才の人となつてしまつたようで、申し訳ないような気がします。

PSIIそうそう、寺島珠雄さんから学んだことのひとつ手づくり封筒があります。

寺島珠雄さんののは、型紙をつくり、それに合わせて切り貼り

したていねいなもの。几帳面な性格、細部をおろそかにしない精神のたまものです。

通信発送用にいつも白枚くらい送ってくれていました。何かきもちが乗らなくて、ものが書けないとき、わたしも精神安定剤として、せつせと封筒づくりをしています。

※ ※ ※ ※ ※

『遊撃』第289号(96/5/27・編集発行人長谷川修児)『遊撃手』(通信欄)から転載

再生封筒

—裏返し封筒—

尼崎市 寺島珠雄

裏返し封筒は、私の場合、気らくにやっています。

朝、新聞に入ってるチラシ、

これの裏日を別にとつてまるめて目の前の本棚につっこむ翌日も翌日も大分ためるときもあり、その朝、本棚につっこまずに封筒にすることもあり、つま

不動産（家屋）関係、次いでは

☆『低人通信』第2次28号(96/

15)

3
3
3
3
3

|| 99 / 7 || 寺島珠雄死去 ||

手紙

相田英子

広告ビラを再利用した
封書は

郵便受けの中で
異彩を放っていた
少額切手を一面に並べた
朱書きの速達は

一層

自己主張に溢れていた

一番新しい日付けは

六月十七日 速達

裏面には

れちまつた悲しみに

も風さへ吹きすぎる

墨書きの詩と顔のスケッチの

中原中也賀集ホスターである

汚と今日は

上ぶたに隠れた封筒の

中には

家への明確な道順図が入ってい

た
八月 九月

郵便受けに
広告ビラ再利用の
封筒は入らない

植木鉢の底を探しても

言付けの欠けらも落ちていない

引き出しの手紙を手にとつて見
る

中也の面長の顔が

限りなく

さびしい

汚と 今日 の欠けた手紙

『現代誌神台』189号(99/9/

25・編集松尾茂夫、三宅武、和

田英子)

寺島珠雄追悼文・詩より転載



断片・寺島珠雄(3)

怪力「珠雄」丸の男気を見た話

中岡光次

正確な時期がはつきりしない
話である。しかしその情景だけ
は四十年近く経った今でも私の
眼に焼きついて離れることはな
い。

「アナキズム講演会」が大阪で
行われるといい、それに付随し
てARFが粉砕行動を起こすと
いう話が耳に入ってきた。AR
Fというのは「アナキスト革命
連合」の略で「キスト」は「キ
ズム」であつたかもしれないが
気になる存在ではあつた。

メンバーには高島洋や日野善
太郎もいたし、高校の二年先輩
のAや同級生のWもそうであつ
た。

私は高校三年の時から終刊
(72/8・第4号)までのほぼ三
年間を「自由連合」で過ごし
た。生まれて初めて文章らしい
文章として「高校生の異議申し

立て」という闘争ルボを書いた
(書かされた)のが第9号(69
/11)だからやはり十八歳の時。
寺島珠雄との初めての出会い
は「自由連合」第22号(70/11)

に連載の「環」として「はんは始
末記」を書いたことによる。は
んはは飯場をもじつたもので、
暴力飯場からその桐鳴に負けて
トンコ(逃)するというのは
きんばな結末のルボであつた。寺
島はその事後結末を読みたくて
次号まで待ったが、載ることが
なかったから来たのだという。

すくなくとも釜ヶ崎の現状に問
題意識を持つ人間がその事態を
放置したまま済ますつもりなの
かということ言うために、わ
ざわざ電車に乗って旭区にあつ
た自由連合のアジトまでやって
来たのだつた。場所は向井孝か
ら聞いたことわつた。

彼は自分の言いたいことを済ませたら私が引き止めるのを無視してスタコラ帰ってしまった。

二度目の対面は基準局や警察に（これは偽名の投書届けた事後報告のため彼のドヤを訪ねたこと。ヨセヤイという彼の口癖を初めて聞かされた。「ヨセヤイ、俺は報告しろなんて言つてねえぞ」と。その時以降訪ねればまづ酒、会えば酒のつき合いが始まった。

私はその講演会のことを聞くために向井孝の部屋を訪ねた。すでに姫路市亀山3-54という

『自由連合』の発行地を離れ、北田辺のアパートから阿倍野旭町の通称サルートンに移っていた時期の事である。

「自由連合はそういうものを後援したり共催したりするような性格の組織ではないから、それは断った。紙面に広告としてはやたらええやろ」という話であつた。私の記憶に間違いがなければ、主催は「麦社」で講師

は大澤正道と江口幹の二人であつた。会場は中之島公会堂。

大澤、江口などは非行動派のオシヤベリスト評論家。ついで向井一派とともにエセアナキスト、日和見主義者などという大変ありがたい評価を彼らから頂戴していたものである。

この講演会を特定する資料はない。私の見ることでできるはいりん資料室蔵『自由連合』はいくつか欠号があつて、その中に載っているのかも知れないが、私が広告を載せたという記憶もない。

会場は五十人程度以上は入る広さだつた。向井一派も何人かいた。彼らは一様に講演会そのものには何の興味もないらしく、粉砕劇の顔末を観戦に来ていたやじ馬であつた。だから当然そこには「やじ馬」を自称する当会発起人の一人松繁逸夫もいた。

ふと気づくと人口近くに座っている寺島珠雄がいるではないか。

私は寺島に近寄つて尋ねた。「寺島、どういふこと？ 何するつもり？」

彼は言うのである。「だってあれを見てみるよ」と。

彼の視線の先に目をやると、そこには落ち着きのないたなずまいの高島洋がいるのである。彼の存在に気づいていなかつた私にしてみれば「あらー、あれまあ難儀なこと」であつた。

高島洋という人はまじめさが人間をしているような存在であつた。ARFや北摂アナ研など

と若者とも共に学ぶのだとして学習会をやり、チューターなども引き受けていたことを知っている。彼にとつてはどちらも大切な存在であつただろう、そのまじめさがこいう板ばさみを生んだとしか言いがたい事象であつた。

だつたらどうする？ 寺島珠雄の答はひとつであつた。

そうこうしていると「ピツ、

ピツ」と笛の音が聞こえてきた。

ドアを押し開けて入つて来た隊列は四列三層の十二人程。先頭は竹ざおで整えられていた。

寺島はその竹ざおに目もくれず、両手を大きく差上げたかと思うと、外側の二人の胸ぐらをねじ上げるように掴み、押し上げた。掴まれた二人は苦しうに顔を後ろにそらせ、前を正視できない状態に追い込まれた。若者十人以上を見事に制止した。きつた一瞬であつた。

私は「ほーッ」と感心感嘆するしかなかった。酒と肴を用意しなかつたことが悔やまれた。

「幸さんカツコエナア」そう思わせる状態がしばらくしてぐらつき始めた。

顔面真っ赤に紅潮させる寺島珠雄の体勢に不安のきざしが見え、それが少し現実のものとなりかけた時、私は参戦した。寺島の背中にしがみついたのである。私の参戦が契機となり日和

見主義者の若者達も戦列に加わった。

その後の戦況については私の記憶にない。ただ向井孝のわき腹に竹ざおで突かれた赤あざが残ったという話を聞いたという程度である。

講演会主催者側の人たちがどう対処したかも知らないし高島洋がどうしていたかも知らない。高島はおろおろしながら茫然と観戦するしかなかっただろう。

戦況落ちていた時、寺島珠雄の姿はもう消えていた。俺の仕事は済んだとばかりに月光仮面のオジサンはスタコラしていたのである。誰への挨拶もなかっただろう、とりわけ高島洋には目も合わせず消えたに違いない。

思えば「自由連合」を通じての出会いだったが、「自由連合」終刊を言い出したのは私で、向井孝はなぜつぶすのかというところの徹底した討論の積み重ねを

主張して譲らなかった。私は寺島に自由連合終刊についての寄稿を求めた。その時の文章がスゴラ的であるよりスタコラ的であれ」というタイトルであったことも懐かしい。

私も用事があつたのでスタコラすることにして中之島公会堂の北側に出たら遠くに小さく寺島の後ろ姿が見えた。

追いかけて「ちよつと一杯やらんですか」と声をかけた。

「神戸に少し大事な集まりがあるから一杯だけだぞ」という。大事な集まりがあるからダメだ、といわないところが彼らしい。西梅田の地下に朝からやうている知られた立ち呑み屋に誘うとそこで文句を言われた。

私が背中に抱きついたことをもって、「あれで負けた」と思っただけというのだ。一人でやるつもりは体バランスが崩れて力が入らなくなつたのだという。

しかし「余計なこと」と言われることがなかつた事にはほつとしたものだった。知らん顔して

もう一杯酒を頼んでも、大事な事がさも無いかのように、酒を呑む寺島が面白かった。

寺島珠雄の怪力と友達に対する男気を見た懐かしい思い出である。

この情景を思い出すと、竹中労の言葉が自然と浮かんでくる。

「人は無力だから群れるのではない。あべこべに、群れるから無力なのだ。」

殴り合いにならなくて良かったと思う。いや、殴り合いになつた方が面白かつたかもしれない。

寺島は殴られても殴り返さなかつただろう。確信をもつてそう思う。彼の眼は若者に対しては、気持ちを起こして行動する若者にはその是非を問わず優しい。それは間違いと失敗の繰り返しであつた自身の青春への感傷がそうさせているのだろう。

か。

《その2》ある現場で

「……ある小建設業者の下で、私はトビと土工関係者の世話役をしたことがある。必要な人員を毎朝釜ヶ崎で調達する手配師役と、工事進行の責任を持つのと、自分の調達した人員への賃金支払いとを兼ねながら自分も現場で労働する役まわりだ。」

寺島珠雄はその著『釜ヶ崎旅の宿りの長いまち』(78/4)に自分の仕事遍歴の一つをそう197頁に書いている。

そしてその工務店で失敗したあと、仲間との共同請取仕事でおこなつた現場の一つに私は誘われた。(同205頁)

一同に賃金で損な役割りにはゴメンだというなら……結局一つの公園を売りし、二つ目の半ばでこの共同請取仕事も解散した。完了した公園に一日だけ助っ人に来てくれた鈴木国男がのちに大阪拘留所で不可解な死に方をしたことも忘れられない」

この鈴木が一日だけ動いた現場

の同じ日に私も一日だけ仕事を
したのだ。仕事は簡単に美
味しい話だった。

植樹をするための穴を掘る。

この現場については「釜ヶ崎語
彙集」の中にその記述がある。

「大正区千島町のガラ棄て場
に土盛りした千島公園（昭和山
海抜約40m）

送り迎え無し、直行の交通費は
前払いで貰った。

直徑50センチ、深さ50センチの
穴を諸取で一個三百円、分担を
決められたエリアの中で掘りた
い数だけ掘ればよい話だ。普通
の土質であれば、非力十方の私
でも一日二十個位は楽に掘れる
話である。土工雑役二千五百円
前後の時のこと。いわゆる「仲
間手配」の仕事は、経費などの
中抜きがないから日当は高かつ
た。

鈴木は用事があるらしく、午
前中で弁当を買ってにこにこし
て帰った。私は昼前には伸びて
しまい、後をどうするか迷って

いた。また六個位しか掘れてい
なかつた。鈴木は帰り際に私の
掘った穴を覗いて「これまたこ
苦勞サン」と軽口を叩いたの
だった。

世話役の寺島は弁当の手配と
進行具合、午後からの仕事の予
定確認のために昼前に回つてき
たが、「こいつはヒデエヤ」の一
言だった。しばらく考えて、「ど
うする」というから「来た以上
は一日分稼いで帰る」と答え
た。

弱音を吐いて帰るわけにはい
くまい。寺島から仕事を誘われ
たのは二回目で、最初は何の間
題もない下手間の片付け仕事で
あったが、やはりまじめに働い
た。どうでも良い人夫出しの現
場であればお陽様西でチンタ
ラやつておれば良いのだが、そ
うもいくまい。「あいつに來て
もらって良かった」と思わせね
ばならない。

私に寺島が割り当てたエリア
は全くの想定外であった。残土
ではなく「ガラ」が集中してい

たのだ。表層は真砂土で覆われ
ているからわからないが、ヌ
コップの歯（刃）が立たないの
である。コンクリートガラにし
ても、鉄筋で繋がっているやつ
も、長尺物の骨材、ガラス、となん
でもありだった。当時は、今と
全く違ひ魔棄の際の「分別」の
必要は無かつた。一応あったの
かも知れないが、現実としては
全くなかつた。掘るべき穴のそ
の場所の下に三メートルほど鉄
骨材が横たわっていたら何とす
る。三メートルを撤去しないと
たつた50センチの穴が掘れない
のである。

しばらく考えたあと、寺島は
「よし！」と、私のスコップを
とつて、手のひらにベツベツと
つばを吹き、素手そのままに猛
烈な勢いで掘り始めた。

「いいよ、寺さん」

いくら語りかけても聞こえぬほ
どの怒濤の掘り方であった。三
個掘るのに一体どれほどの時間
がかかったか、その時の疲れた

私の感覚からすればアツと言う
間であつた。

計九個だから一日分の日当分
は超えた。「掘りたかつたら弁
当食つて帰つてイイゾ」すまな
かつたなと言葉にする代わりの
無償の行為であつた。

「二日分を稼いで帰る」とは
自分の力で、という意味だから
あと三個何とか掘つて帰つた。
寺島から受け取った封筒には単
純計算以上の金が入っていた。
つまりいくらかの「一色」をつけ
てくれた。

寺島珠雄は「完了した」と書
いたが、それは寺島の任務が完
了しただけであつた。この現場
は施主である大阪市によって工
事が中断された。私の掘つた穴
かきつかけで施行条件違反が発
覚したのだ。一メートルの
厚さで覆土せねばならなかつた
のである。がれきのすぐ上に植
樹したところで根付くわけがな
い。全体であと四分の一ほど
残つたらしいが、元請責任とし
て寺島たちの請け負いグループ

には全額支払われたという。半分は「私のおかげ」「久しぶりに儲かった」ということでわざわざ

情報BOX

『ふるさと詩人』と

寺島珠雄

◎A66「ふるさと詩人」77/111

創刊51号(96/11)終刊。

千葉市中央区星久喜町910-

0星心荘 ふるさと詩人発行所

鈴木勝。

①第2号(78/11)

エッセイ「なくしたものとなく

かしい人」

あてなしの旅を重ねる寺島が携

えていた棺に入った最後の写真

と小川三男が「東日本新聞」に

寄せた父の追悼文の切り抜きの

ことである。播州赤穂御崎の海

岸で焼いてしまったという。な

ぜ焼いたのかということには触

れていない。「ふるさと」への決

別であつたのだろうか。寺島が

投稿もした「東日本新聞」の経

営者で詩人の越川芳麿。越川広

という詩人は寺島が軍法会議へ

と護送される時の情景詩を「寒

ぞ飲ませてもらうことにもなつた。「この頂つづく」

た。「この頂つづく」

いような作品」と評した。その

掲載誌もなくしたもののひとつ。

二人の越川、二十才代前半のそ

のまた前の方で会っただけのた

だやたらになつかしい。

要搜索・東日本新聞は千葉県立

東部図書館にマイク口で聴く。

③第10号(80/11)

詩「本と兄弟」大木静雄 文木

に紹介する。

詩「風景歌」寺島珠雄 子供の

頃のふるさとの風景。

④第11号(80/11)

詩「ことしもまた」大木静雄

あと「日で六十一才になる白髪

の男が店の定休日・庭の草

むしりをしている。：六十年間

ついに花咲くことになった男

は「金欲しさまきはさむと庭

に出て醜草を抜くその醜草を：

男： 受贈誌「月刊近文」

「91/168号」「解氷期」13号。

これは寺島が贈つたものである

うか。

(大阪市)寺島珠雄(八街町) 大木静雄 鈴木勝「第二ふるさと詩集」恵贈への返書。

⑥第20号(83/5)

詩「貴、市役所ノ玄関ア」遠

藤寛夫ニオクル」寺島珠雄。

「キミガ死ンダトイウ。キミガ。

ソレカラモ会ツタノニ去年

王会ツタノニ。遠藤は千葉日

報整理部長。何度も飲んだ仲。

寺島が新米土方の頃、ビル建設

工事現場で、夜警員として出会っ

た。

⑦第28号(85/10)

鈴木勝「戦争から平和への詩集」

恵贈への返書。(尼崎市)寺島珠

雄。松永伍市「風間光作の名

も見える。

⑨第32号(87/3)

鈴木勝「星久喜詩情」恵贈への

返書。尼崎市・寺島珠雄 八街

町・大木静雄

⑩第33号(87/7)

鈴木勝「鈴木勝詩集」恵贈への

返書。八街町・大木静雄

⑪第34号(87/10)

詩「ならしの錦を飲む」寺島珠

雄。酒飲まぬ兄が送ってくれた

「ならしの錦」。下総の酒めで

ている灘の月

鈴木勝「綿屋久喜詩情」恵贈への返書。兵庫県尼崎市・寺島珠雄 千葉県八街町・大木静雄。

⑬第39号(89/5)

詩「消滅史(一) 貴が見える」

「消滅史(二) 櫻と山茶花」消

滅史(三) たたすまいなど」消

滅史(四) はがきを書く」寺島

珠雄。(一)は「月刊近文」84

5初出。(二)は「解氷期」78

2初出。(三)は「文学学校」82

12初出。(四)は「ニスモ」

832初出。いずれも「片信」

所載。

⑭第42号(90/4)

詩「新編酒食年表」テルバム外

1(同2)(私版街道通覧)(掉

色川武市(再開待機)(純米二

級一七五〇円(むらべうたから

⑮第43号(90/8)

鈴木勝詩集「餘生にあらず」恵

贈への返書。尼崎市東七松町・

寺島珠雄八街町・大木静雄。

⑯第46号(91/10)

詩「一味 思い出した」寺島珠

雄 芥子菜の漬物 錦の刺身 焼

きはまぐりて一杯(船橋から届

く梨 91・9・13の日付け。

⑰第48号(92/4)

エッセイ「鈴木勝さんと小野十

三郎(新興歌謡小史への少し付

け足し」。「詩精神」「詩神」第一次「弾道」などを通じた二人の交流を描く。付録した小野の手帳からの「技術の純粋性について」のメモは興味深い。

中野重治 雨の降る品川驛 気取り、無理矢理に一つの状態をかたちづける不自然さ、技術としてもまづい。中野重治の「名作」とされる「雨の品川驛」を当時としての断片批評である。

小野の批評にそういう見方もあるのかという思い。

⑨第49号(93/9/30)

詩「冬の泥鰌」『朝日新聞(大阪)』92/2/14夕刊初出。『信録』所載。

⑩第51号(終刊号96/1/1)

最終号の表紙は詩「訪問 一鈴木勝さんへ」と寺島陽影の鈴木勝の写真で飾られた。鈴木はこの時米寿を過ぎ越して満90歳であった。よくここまで続いたものだ。

「消滅史」を各々独立したものとすれば詩1篇、エッセイ2篇、書簡が4点。鈴木勝の旺盛な出版意欲にも驚かされるが、それに応える寺島の書簡は美に丁寧でゴマカシのないものである。ありきたり

の褒め言葉ですませることが一切なく、鈴木勝への素直な敬意が見てとれるのである。

寺島珠雄の人物評価は何を基礎に据えているのだろうか。それは詩人としてのその詩の評価であり、詩に臨む詩人としての姿勢、この二点に尽きるような気がする。

それは好き嫌いも含めた人間性への評価であり、思想で并別する以前の問題であったのだろう。

鈴木勝は戦中右傾し、敗戦後は異議を對めるなど自民党の奥連幹事長にまでなった人物である。小野十三郎も進歩的知識人の様相を深め、日本共産党の選挙の際には宣伝塔のような役割を果たしていた。私にしてみれば二人とも過去そういうことがあったに過ぎない人物である。いわば既成政略の左右分極した二人を同様に尊敬できる離れ業は寺島珠雄ならではのことであるか。

私は寺島珠雄の「感傷」に魅かれる。「感傷詩人」と勝手に解釈していたが、『ふるさと詩人』を通してみて「ふるさと詩人」という形容詞も悪くはないなと思つてい

る。

年末に東金市立東金図書館の大本さんより、レターパックで18点

の『ふるさと詩人』複写物が届けられた。中身を調べてみたところ、はすの複写料金の請求書が見あたらなかった。添え文には「なお、二पी一代は大本より、会の方への寄附とさせていただきますので、お納めください」とあった。想定外のことでした。感謝を越えた嬉しい気持ちになりました。

本と兄弟

大本静雄

表紙に毛筆で姓名を書いた幅一厘

長五厘くらいの和紙を貼つて

見返の扉に「許可」の印が捺されて

本がなん冊かある

敗戦の日を迎えた海軍刑務所も

含めて

戦前 戦中 戦後を

網走番外地から長野市無番地ま

で

現世と隔絶した厚い塀のなかの男

差入れた本。一いちばん大切にしてきた本。

いま 還暦を迎えて白髪の男と頭の毛の薄くなった六ッ違いの兄弟が

なにかを考えた

なにかをした

青春の軌跡を

こんなところから辿ろうとして

それは

もう 無理だ。

せめて 今も多くを言わずに

通い合う

同じ本でわけあった感性和行動

の

相似性と

見果てぬ夢の継続の証しを

残っている数少ない本の

貼り紙の白頭哈を

つぶやいてみよう

絵描きになりたくて

八年前に巴里に渡つた

ひとり娘のいる白髪の兄と

生涯独身のもの書きで

暮らすつもりらしい結婚歴の二

回ある

髪の毛の薄い男と
どちらも
あと二十年は
生きられないだろう。

注・兄静雄はこの詩の15年後の94
7/27没。弟は20年後の99/7/22
没。同じように共に8月初旬の生
れ。

貴重な発見がありました!!

- ①Aカ「人間喜劇」創刊号(66
7/1)・第二号(67/8/1)井
上俊夫編集 人間喜劇の会
②A17「筆ヶ崎通信」創刊号(68
9/25) N6棚
③A34「麗」創刊号(70/5/1)
(2号)と号はあいりん資料室に
所蔵)

以上三冊 貴重な発見です。

とくに「人間喜劇」は寺島雄
が筆ヶ崎で初めて加わった同人誌
で、その二号で詩「ささやき」が
「暴動」を煽動するものとして問題
とされ東海修から詩の削除もしくは
寺島の除名が要求され、結果解
体分裂したものの、そのいきさつは
A512雑誌「新潮」6/2で寺島
があまりにかにしている。二号は東
洲が経営する喫茶店に積まれてい

たらしいから、その存在すら危う
いものと考えていた。ところが茨
木市立中央図書館に併設されてい
る「富士正晴記念館」に所蔵が確
認された。竹島昌威知が富士正晴
に贈呈したものである。次号に
て詳細したいと思う。

「協賛金納入者」敬称略

11/12/19/12/2/10

上村とし子、伊藤公一(伊藤実
奈子)、堀切利高、田中義行、岩
本乾治、郡淳一郎、田中芳秀
小俣賢治(松繁逸夫)、K・S
計三九、〇〇〇円
叢書売上 各一冊
計三、〇〇〇円

※詳しい会計報告は次号にて

「短信欄」

▽それにしても幸せ者だね、寺
島さんは。死後もこんなにしてい
くれる人がいて。田中義行氏
▽伊藤公一は昨年死去いたしました
が、寺島さんとの生前のお
付き合いを思いカンパします。

伊藤実奈子氏

▽「会報」第二号拝受。すみずみ
まで読みました。こんな実のあ
る、気合いのこもったパンフも
めずらしいな。

さすが身近におられた方の記述
には、精彩があります。

もつといういろいろ書いてくださ
い。

小沢信男氏

○事務局便り○

◎会報第二号は暮れの26日には
発送するつもりだったが、一号
の間違いの発覚、二号広告の不
備などにわずらい、郵便局にも
行けず、結局大晦日夜にセブン
イレブンで55通のメール便の発
送。セブンイレブンのお姉さん
は大量の封筒を前に顔をひきつ
らせていた。現在会員は41に増
えている。会報を複数部数希望
される方は遠慮なくご連絡を。
クロネコメール便はありがたい
もので厚一センチまで80円。

◎編集後記◎佐藤信子さんから
ありがたいお手紙を頂戴しまし
た。多くの方と触れることで会

を始めよかったですと思うことが
多々起こります。また私個人に
「どんなに書いてください、楽し
みにしています」という励まし
も頂くようになりました。それ
はそれでありがたいのですが、
少し複雑な気持ちがあります。
会報の中に占める私の割合
が多過ぎるのです。

私の書きつづりを前に、投稿
を尻込みされる方がおられる様
です。私と寺島さんとの交流は
特殊格別なものがありました。
「私と寺島さんとの付き合いは
たいしたものではありませんか
ら」などと聞かされるとため息
が出ます。佐藤信子さんのお手
紙からはそんなことはどうでも
良い話に聞こえます。つまらな
い遠慮はご無用にも。ささいな投
稿お待ちします。

【中田】

三号の遅れはひとえに編集担当
の私のせいです。御免。いたた
いたお便りをためてしまつたの
で本号は特別に16頁建て。次号
からは12頁に戻す予定です。投
稿をお待ちします。

【前田】